開善寺境内遺跡

2001年3月

長野県飯田市教育委員会

開善寺境内遺跡

2001年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市竜丘地区は、飯田市街地の南に位置し、天竜川河岸から木曽山脈前山の麓から伊賀良地区にかけて広がる台地に位置しています。

このような地形を利用して、私達の祖先は生活を営み、その痕跡が遺跡として現代に残されてきています。これらは私達の地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できるかぎり埋蔵文化財として現状のままで後世に伝えていくことが私達の責務であります。

近年、竜丘地区は国道151号線に沿っている場所から、宅地化や道路整備が進みつつあり、今次調査箇所もその一画にあたります。この一帯には、竜丘古墳群をはじめとして140余の古墳が点在しており、当時の集落跡も多数確認されております。このために関係各機関と協議の結果、工事実施に先立って緊急発掘調査を行って、記録保存を図ることになりました。

調査結果については本文に述べてあるとおりですが、今回の調査で縄文時代から奈良時代以降の生活の様子、特に古墳時代の集落が明らかとなりました。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料になると確信しています。

最後になりましたが、調査の実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた近隣の方々をはじめ、調査に関係された全ての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成13年3月

飯田市教育委員会

教育長　冨田　泰啓

例　言

1．本書は、市道竜丘34号線建設に先立ち実施した、飯田市上川路　開善寺境内遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、飯田市建設部から委託を受けて飯田市教育委員会が実施した。

3．平成11年度に現地作業、平成12年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。

4．調査実施にあたり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。

5．発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてＫＺＫを一貫して用いた。

6．本報告書では、以下の遺構略号を使用している。

住居址……ＳＢ
溝　址……ＳＤ
土　坑……ＳＫ

7．本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。

8．土層の色調については、『新版標準土色帖』1998年版の表示に基づいて示した。

9．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により福澤好晃がおこなった。

10．本書の執筆と編集は、福澤が行い小林正春が総括した。

11．本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位㎝）を表している。

12．本書に関連した出土遺物および図面写真類は、飯田市教育委員会が管理し、遺物および図面類は飯田市上川路1004-1番地　飯田市考古資料館に、写真類は飯田市上郷別府2428-1番地　飯田市上郷考古博物館に保管している。

本文目次

序
例言
第Ⅰ章　経　過 …… 1
　第1節　調査に至るまでの調査 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
　第3節　調査組織 …… 1
　　（1）調査団 …… 1
　　（2）指　導 …… 2
　　（3）事務局 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 3
　第1節　自然環境 …… 3
　第2節　歴史環境 …… 3
第Ⅲ章　調査結果 …… 9
　1．遺構と遺物 …… 9
　　（1）竪穴住居址 …… 9
　　　1）．古墳時代 …… 9
　　　2）．奈良時代以降 …… 10
　　（2）溝址 …… 12
　　　1）．時期不明 …… 12
　　（3）土坑 …… 12
　　（4）遺構外出土遺物 …… 12
第Ⅳ章　まとめ …… 16
　1．縄文時代 …… 16
　2．弥生時代 …… 16
　3．古墳時代 …… 16
　4．奈良時代 …… 17
参考文献 …… 18
報告書抄録 …… 33

挿図目次

挿図1　調査遺跡位置図 …… 4
挿図2　基準メッシュ図区画調査位置図 … 6
挿図3　調査位置及び周辺遺跡地図 …… 7
挿図4　遺跡全体図 …… 8
挿図5　ＳＢ03・ＳＢ04・ＳＢ05
　・ＳＢ16・ＳＢ17 …… 11
挿図6　ＳＤ13 …… 12
挿図7　ＳＫ …… 13
挿図8　ＳＫ …… 14
挿図9　Ｐｉｔ図 …… 15

遺物図版目次

第1図　SB03（1）・SB04（2～11） …… 19
第2図　SB05（1～3）・SB06（4～12） … 20
第3図　SB06（1～6）・SB07（4～12）
　・SD03（8～10）・SK08（11・12）
　・SK11（13）・SK13（14）・SK15（15）
　・SK16（16・17）・SK20（18～21）
　・SK22（22～25） …… 21
第4図　SK22（1～8）・SK24（9～11）
　・遺構外（12～18） …… 22

写真図版目次

図版1　調査風景　同上
重機風景…… 23
図版2　西側調査区全景
東側調査区全景 …… 24
図版3　SB05　同カマド …… 25
図版4　SB03　SB06 …… 26
図版5　SD03　SK07　SK08　SK09
SK10　SK11　SK12 …… 27
図版6　SK13　SK14　SK15
SK16　SK17　SK18
SK19　SK20 …… 28
図版7　SK20　SK21　SK22
SK22断面　SK24　SK25
SK26　SK27 …… 29
図版8　SB03　SB04　SB05 …… 30
図版9　SB06　SB07　SD03
SK08～SK20 …… 31
図版10　SK22　SK24　SK22
SK24遺構外 …… 32

第Ⅰ章　経　過

第１節　調査に至るまでの経過

平成９年度に飯田市建設部より、飯田市上川路地区における市道竜丘３４号線建設工事の計画が提示された。事業計画地は埋蔵文化財包蔵地開善寺東遺跡・開善寺境内遺跡にかかり、同年、埋蔵文化財発掘の通知が提出された。平成10年度にかけての工事実施区域は、開善寺東遺跡の東端斜面にあたり、試掘調査実施が困難なため、工事実施時に立会調査をおこなった。

平成11年度工事実施箇所は、平坦地となり試掘調査の実施が可能であるため、飯田市建設部・飯田市教育委員会の両者で協議をおこない、作物収穫後に試掘調査を実施し、その結果に基づいて改めて協議することとなった。

試掘調査は、平成11年11月４・５日に実施した。その結果、古墳時代の住居址と思われる遺構が確認され、該期の遺物も多数出土し、集落が営まれていたと考えられ、本発掘調査が必要であると判断された。しかしながら遺構検出面が深く、また用地は幅４ｍ程と大変狭いため、試掘調査にてトレンチを掘るだけで土を置く場所がいっぱいであり、拡張して表土剥ぎ作業をおこなうことが困難な状況であった。

そこで改めて両者で協議をおこない、工事実施で削平される用地内東側については全面調査を実施し、遺構検出面が保護される部分についてはトレンチ部分の本発掘調査とすることとした。

第２節　調査の経過

平成11年11月８日、重機にて調査区東側の表土剥ぎ作業を行い、翌９日に株式会社ジャステックによる基準点測量作業と作業員による検出作業を開始し、本発掘調査に着手した。

そして11月30日に株式会社ジャステックによる空中写真撮影を行い、現地での作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の基礎的な整理作業を行った。

平成12年度は、引き続き飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記作業、遺物の実測・拓本、遺構図等の作成・トレース作業、版組などを行って本報告書作成作業に当った。

第３節　調査組織

（１）調査団

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　小林恭之助（～平成11年12月）
　　冨田　恭啓（平成11年12月～）

調査担当者　福澤　好晃

調　査　員　佐々木嘉和　小林　正春　馬場　保之　澁谷恵美子　吉川　金利　伊藤　尚志

下平　博行　坂井　勇雄
藤原　直人（財団法人長野県文化振興事業団より派遣）

作業員　新井　幸子　新井ゆり子　池田　幸子　伊東　裕子　太田　沢男　金井　照子　唐沢古千代
北原　裕　木下　貞子　木下　早苗　木下　義男　木下　玲子　小池千津子　小平まなみ
小林　千枝　斉藤　徳子　佐々木真奈美　佐藤知代子　関島真由美　瀬古　郁保
高木　純子　竹本　常子　橘　千賀子　田中　薫　田中　博人　筒井千恵子　中沢　温子
中田　恵　中平けい子　中村地香子　仲村　信　林　勢紀子　林　ひとみ　原　昭子
樋本　宣子　平栗　陽子　福沢　育子　古林登志子　牧内　修　牧内喜久子　牧内　八代
松下　博子　松島　保　松本　恭子　三浦　厚子　宮内真理子　森藤美知子　森山　律子
吉川　悦子　吉川紀美子

（2）指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

（3）事務局

飯田市教育委員会

関口　和雄（教育次長　平成11年度）
久保田裕久（〃　平成12年度）
小畑伊之助（博物館課長　平成11年度）
米山　照実（〃　平成12年度）
小林　正春（〃　埋蔵文化財係長）
馬場　保之（〃　埋蔵文化財係）
澁谷恵美子（〃　）
吉川　金利（〃　）
福澤　好晃（〃　）
伊藤　尚志（〃　）
下平　博行（〃　）
坂井　勇雄（〃　）
今村　進（〃　庶務係長）
松山登代子（〃　庶務係）

第II章　遺跡の環境

第1節　自然環境

飯田市竜丘地区は市街地の南約8㎞程にあり、臨済宗の名刹「開善寺」を中心とした上川路面の段丘に広がっている。

上川路は旧竜丘村の南端に位置し、久米川を境に南は川路地区に接している。竜丘地区の東は天竜川の花崗岩を刻み込んだ深い渓谷により、天竜川と接しているが、沖積低地は時又の一部と、上川路面の一部のわずかであり、大部分が洪積期の台地からなる。東から西に次第に高まる段丘地形が発達し、開善寺の北側はすぐ段丘崖となっている。この上は東西にのびる舌状の低位洪積台地となり、この北を流れる臼井川を隔てて塚原古墳群のある台地となり、駒沢川によって切られて、一段高い桐林の段丘面となり、高位段丘の臼井原面へと続いている。

西は緩い傾斜面を成す段丘崖が山となっており、この上は飯田市中村の台地面が展開している。天竜川の支流である久米川を越えた西側は、小高い丘陵が続いて伊豆木地区となる。南は約100mで久米川を隔てて、また東は最低位の沖積段丘面となって川路地区となる。南東約500mを天竜川が南流し、天竜峡の渓谷入口に至る約2㎞程の間は天竜川の氾濫源が広がる。

開善寺境内遺跡は開善寺周辺の平坦面一帯で、標高は385m前後、天竜川との比高差は15mである。

当調査地点は、開善寺山門より約100m程東側の、遺跡北東縁部分にあたる。

第2節　歴史環境

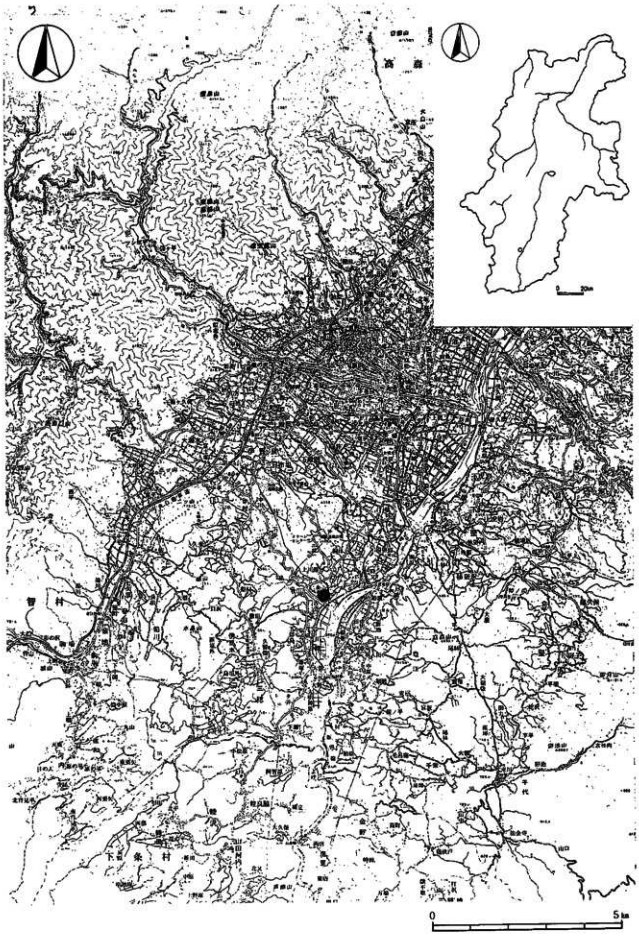
開善寺を中心とした上川路面の一帯からは、表面採集により縄文時代中期・弥生時代後期・古墳時代から平安時代に至る遺物が大量に発見され、特に白鳳時代の瓦の出土が注目されている。その他鉄斧・紡錘車等も出土し、縄文時代以降の生活適地であったと判断される。

周辺の遺跡を見ると、久米川を挟んで一段高い洪積段丘面に、縄文時代前期の今洞遺跡が、臼井川の北には古墳時代の塚原遺跡がある。また段丘面西端には、重要文化財の画文帯四仏四獣鏡出土が伝えられる長野県史跡の御猿堂古墳があり、北方の段丘上にも同じく県史跡指定の馬背塚古墳がある。

竜丘地区には、前記した古墳を含めて140基以上の古墳が築造された事実があり、古墳時代以降地域の中心として、さらには大和王権による東国経営上において重要な地であった事が窺え、古墳時代後期に前方後円墳を築造した一族が、奈良時代に入る前の白鳳期において古墳とは異なった権力の象徴として、寺院の建立をおこない、それが上川路廃寺として位置づけられる。

昭和48年に飯田市考古資料館建設に先立ち実施した発掘調査では、現在の開善寺の旧伽藍の一画にあたると考えられる中世の堂宇が確認され、また平成元年に実施した上川路公民館建設に先立つ発掘調査では、時代を特定できる遺構は確認されなかったものの、縄文土器・埴輪片・土師器・須恵器をはじめ、布目瓦等が出土している。

現在の開善寺は、飯伊地方の禅寺として最も古いものの一つで、鎌倉時代伊賀良庄地頭北条江馬氏によって開禅寺が大鑑禅師を開山として創建された。北条氏滅亡後、信濃国司小笠原貞宗によって開善寺として存置継承され、寺運を高めたものと見られている。かつては七伽藍、東西両藩の僧坊を持ち、小笠原氏の道場

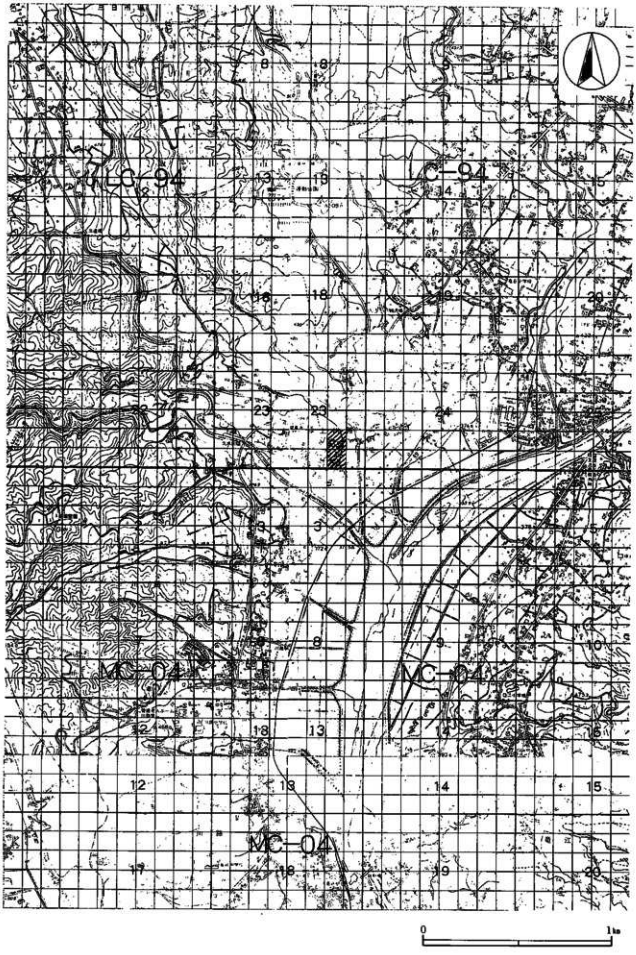


挿図1　調査遺跡位置図（1：50,000）

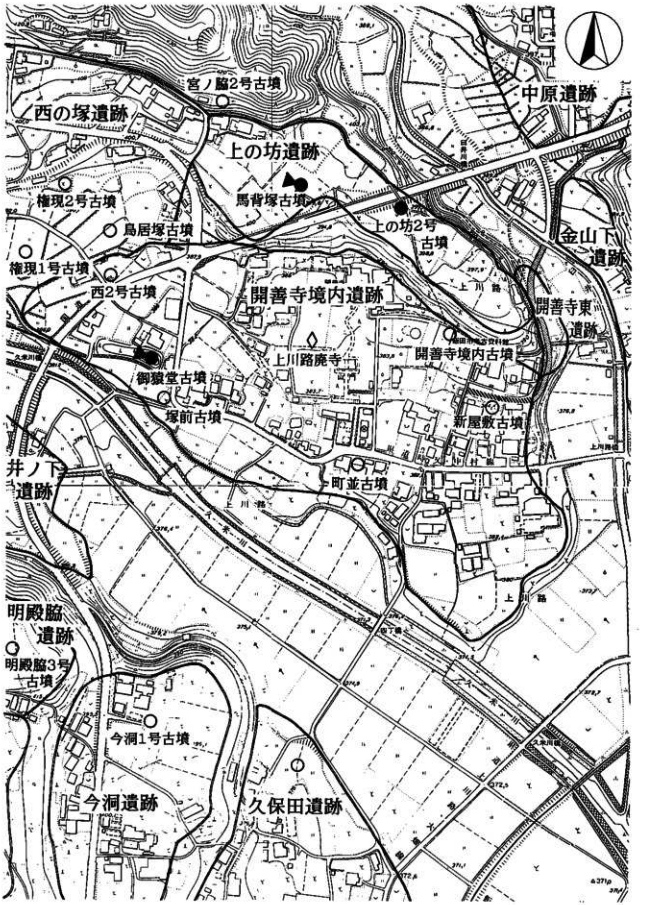
であり、室町幕府によって十刹に列された名刹である。

明応8年（1499）に火災にあい、「七堂悉焼亡唯山門存矣」と山門一宇を残して七堂すべてが焼失し、永年3年（1506）にも火災になっている。その後小笠原氏の勢力衰退により寺運も衰え、荒廃に傾く事態に至った。

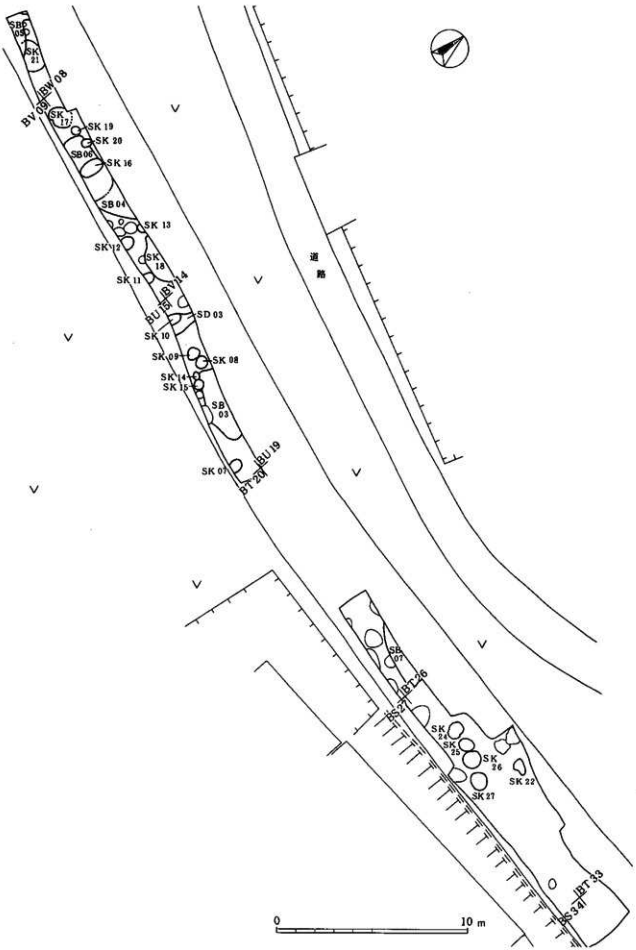
天文10年（1541）武田信玄の援助によって、信玄と親交のあった遠伝和尚が住職となり、復興にあたった。しかし、天正10年（1582）織田信長の信濃侵入の際に兵火に遭っている。山門を除き、現在の建造物は江戸時代に再建されたもので、元禄11年（1568）境内絵図写しによると、ほぼ同じ建造物が見られ、さらにかつてあった堂宇址が示されており、その規模の大きさを窺うことができる。山門は重要文化財、鐘楼は重要美術品に指定されている。



挿図2　基準メッシュ図区画調査位置図



挿図3　調査位置及び周辺遺跡地図


SB05
SK 21
SK 17
SK 19
SK 20
SB06
SK 16
SB04
SK 13
SK 12
SK 18
SK 11
SD 03
SK 10
SK 09
SK 08
SK 14
SK 15
SB 03
SK 07
SK 55
SK 54
SK 23
SK 56
SK 22
SK 27
SS 41
道路
0
10 m

押図4　遺構全体図

第Ⅲ章　調査結果

今次調査において確認された遺構は、下記のとおりである。

竪穴住居址	5軒
溝　　址	1条
土　　坑	20基

1．遺構と遺物

（1）竪穴住居址

1）古墳時代

①3号住居址（挿図5）

検出位置		BT・BU－17・18	覆土		3層
切合	切る	SK14・GP	床面		明確であるが軟弱
	切られる	SK15	住居内施設	主柱穴	P1
規模・形状	プラン			貯蔵穴	不明
	規模 m	隅丸形		入口	不明
	主軸	4.0×（1.2）		炉・竈 形状	不明
	壁高	N15° E		規模	
	状態	ほぼ垂直		特記事項	
出土遺物（第1図） 土師器壷					
特記事項 壁面と同じく軟弱で、南側の一部のみ確認。					
時期		古墳時代5世紀後半	根拠		出土遺物

②4号住居址（挿図5）

検出位置		BV－11・12	覆土		床面のみ検出
切合	切る				竪固で明確
	切られる	SB06・GP	住居内施設	主柱穴	P1・P2
規模・形状	プラン	不明		貯蔵穴	不明
	規模 m	（2.4）×（1.4）		入口	不明
	主軸	不明		炉・竈 形状	不明
	壁高	（2）		規模	
	状態	不明		特記事項	
出土遺物（第1図） 土師器壷・甕・高坏 石器　縄文土器					
特記事項 床面のみ検出した。					
時期		古墳時代5世紀後半	根拠		出土遺物

③5号住居址（挿図5）

検出位置		BW−06・07	覆土		2層
切合	切る	SK21・GP	床面		明確であるが軟弱
	切られる		住居内施設	主柱穴	不明
規模・形状	プラン			貯蔵穴	不明
	規模 m	(1.6)×(0.8)		入口	不明
	主軸	(NS)		炉・竈 形状	
	壁高	20		規模	55×(47) 煙道 (34)×25
	状態	ほぼ垂直		特記事項	構築石材の一部を確認

出土遺物（第2図）

土師器甕　石器

特記事項

北側の壁面とカマドを検出する。

時期	古墳6世紀前半	根拠	出土遺物

④6号住居址（挿図5）

検出位置		BV−10・11	覆土		2層
切合	切る	SB04	床面		明確であるが軟弱
	切られる	SB16・SK20	住居内施設	主柱穴	P1・P2
規模・形状	プラン	隅丸長方形		貯蔵穴	不明
	規模 m	3.4×(1.4)		入口	不明
	主軸	(NS)		炉・竈 形状	不明
	壁高	20		規模	
	状態	ほぼ垂直		特記事項	

出土遺物（第2・3図）

土師器壺・甕・坏・高坏　須恵器蓋　縄文土器

特記事項

北側の一部を観察した。縄文時代中期から弥生時代後半の遺物が混入する。

時期	古墳時代6世紀前半	根拠	出土遺物

2）奈良時代以降

①7号住居址（挿図5）

検出位置		BT−25・26	覆土		
切合	切る	GP	床面		
	切られる		住居内施設	主柱穴	
規模・形状	プラン			貯蔵穴	
	規模 m	(3.6)×(0.9)		入口	
	主軸			炉・竈 形状	
	壁高			規模	
	状態			特記事項	

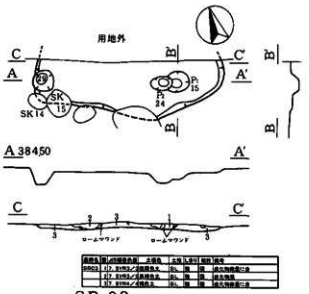
出土遺物（第3図）

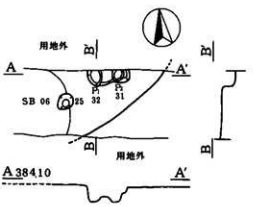
須恵器蓋

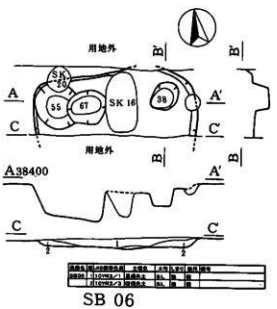
特記事項

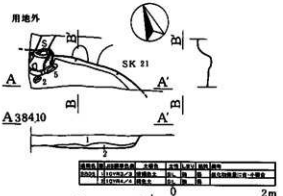
試掘にて確認したのみで、拡張した際の土置き場となる。

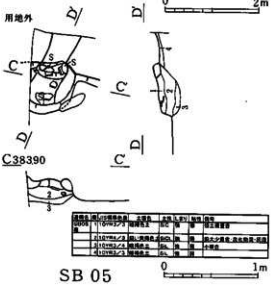
時期	奈良時代以降	根拠	出土遺物

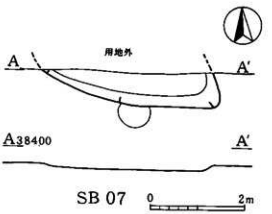










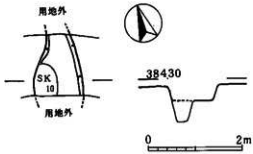


挿図5　SB03・SB04・SB05・SB06・SB07

（2） 溝址

1）時期不明

SDNO	図NO	検出位置	重複	規模(長X大幅X大深) (小幅X小深)m	主軸	覆土	時代・時期	出土遺物	備考
3	6	BU・BV-15	SK10	(1.3)×1.1×0.17 0.5×0.07	N15°E	10YR3/4	古墳後期	土師器片	弥生時代後期 前半土器出土



挿図6 SD03

（3） 土抗

SKNO	図NO	検出位置	規模(長X短X深)cm	形態	覆土	時代・時期	出土遺物	備考
7	7	BT19	(62)×62×43	楕円形	10YR4／4	不明	土器片	
8	7	BU16	68×60×44	円形	10YR2／3	不明	なし	
9	7	BU16	68×62×15	不定形	10YR3／4	不明	土器片	
10	7	BU15	68×50×37	楕円形		不明	土器片	SD03と重複
11	7	BU・BV14	58×54×12	楕円形	10YR2／3	不明	土器片	
12	7	BV13	68×60×32	楕円形	10YR2／3	不明	高坏片	
13	7	BV13	48×(24)×28	不定形	10YR2／3	縄文中期	土器片	
14	7	BU17	42×30×15	楕円形	10YR4／4	不明	土器片	SB03に切られる
15	7	BU17	56×48×27	円形	10YR4／4	不明	土器片	SB03を切る
16	7	BV11	126×66×70	胴丸長方形	10YR3／3	不明	土師器片	
17	7	BV・BW9	(84)×200×50	不定形	7.5YR4／4	不明	土器片	
18	7	BV13・14	270×(88)×33	不定形	2層	不明	なし	
19	7	BW10	50×44×31	円形	10YR3／4	不明	土師器片	
20	7	BW10	56×46×31	楕円形	10YR3／4	古墳後期	土師器片	
21	8	BW07・08	172×100×69	不定形	2層	不明	土器片	
22	8	BT・BV30	86×60×26	不定形	10YR3／4	縄文中期	縄文土器	壁面は軟弱
24	8	BT28	94×74×68	不定形	10YR3／4	古墳後期	土師器片	6世紀代の甕
25	8	BT28・29	80×64×51	楕円形	10YR2／3	不明	なし	
26	8	BT29	94×88×55	円形	10YR2／3	不明	なし	
27	8	BS29・30	100×88×51	円形	10YR3／4	不明	なし	

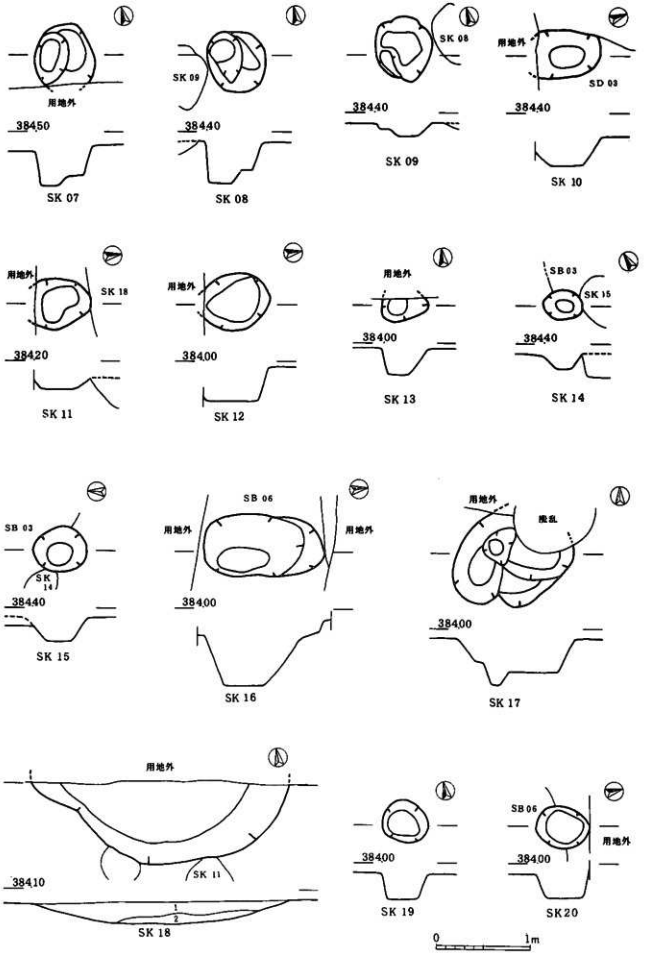
（4） 遺構外出土遺物

縄文時代中期から古墳時代各時期の遺物が出土し、文様等が明確にわかる遺物のみ提示した。

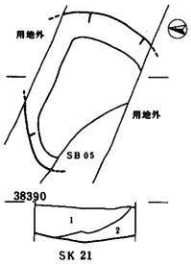
第4図12～16は縄文時代中期中葉で、確認されたSK22と同時期である。

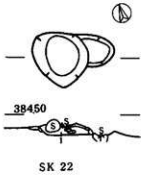
弥生時代の遺物とし図示したものは第4図17のみであり、他の遺構の埋土より出土したものとほぼ同時期である。

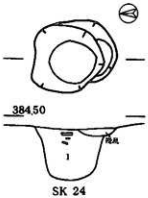
古墳時代の遺物は土師器のみであり、須恵器の遺構外出土はない。

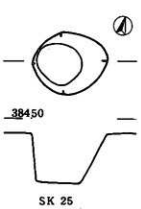

用地外
38450
SK 07
SK 08
38440
SK 08
SK 09
用地外
SD 03
38440
SK 10
用地外
SK 18
38420
SK 11
用地外
38400
SK 12
用地外
38400
SK 13
SB 03
SK 15
38440
SK 14
SB 03
SK 14
38440
SK 15
SB 06
用地外
用地外
38400
SK 16
用地外
撹乱
38400
SK 17
用地外
SK 11
38410
1
2
SK 18
38400
SK 19
SB 06
用地外
38400
SK 20
0
1m

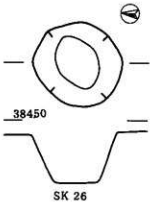
挿図7　ＳＫ０７～２０

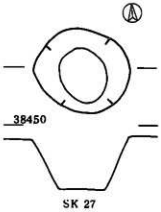






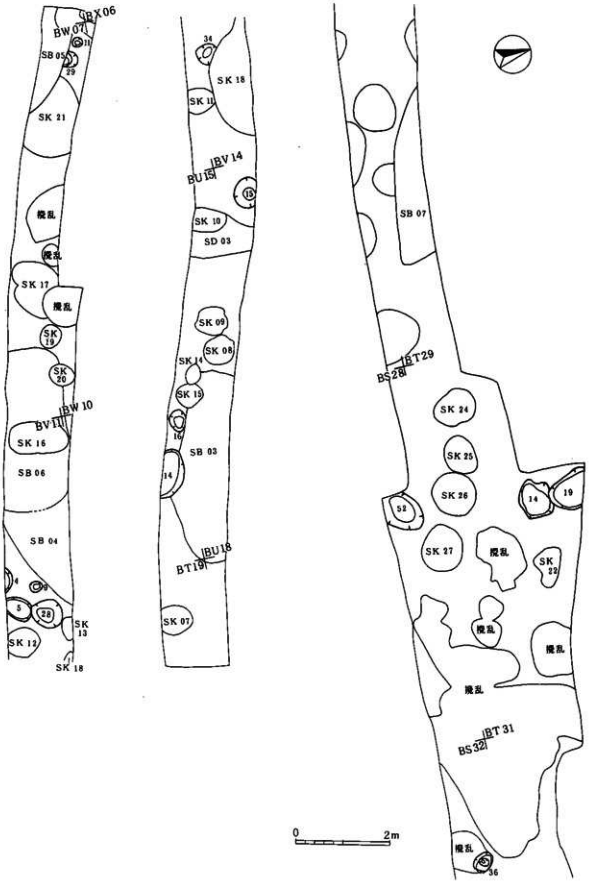






遺構名	層	ＪＩＳ標準色調	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
SK07	1	10YR4/4	褐色土	SiL	強	弱	砂をブロック状に含
SK08	1	10YR3/3	黒褐色土	L	強	弱	小礫含
SK09	1	10YR3/4	暗褐色土	SiL	強	弱	現代物混入に含
SK10	1	10YR4/4	褐色土	SiL	強	弱	
SK11	1	10YR2/3	黒褐色土	SiL	強	弱	
SK12	1	10YR2/3	黒褐色土	SiL	強	弱	礫含
SK13	1	10YR2/3	黒褐色土	SiL	強	弱	小礫含
SK14	1	10YR4/4	褐色土	SiL	弱	弱	
SK15	1	10YR4/4	褐色土	SiL	弱	弱	
SK16	1	10YR3/3	暗褐色土	SiL	強	弱	
SK17	1	7.5YR4/4	褐色土	SiL	強	弱	小礫多数含
SK18	1	10YR3/3	暗褐色土	SiL	強	弱	斑状
	2	10YR4/4	褐色土	S	弱	弱	砂礫含
SK19	1	10YR3/4	暗褐色土	SiL	強	弱	ローム粒
SK20	1	10YR3/4	暗褐色土	SiL	強	弱	小礫含
SK21	1	10YR3/4	暗褐色土	SiCL	強	強	礫多含含・0.5下0.5大粒・粘土ブロック混・現代物混入に含
	2	10YR4/3	黒い褐色土	SiL	強	弱	
SK22	1	10YR3/4	暗褐色土	SiL	弱	弱	
SK24	1	10YR3/4	暗褐色土	SiL	強	弱	礫多含含・0.5下0.5大粒
SK25	1	10YR2/3	黒褐色土	SiL	強	弱	
SK26	1	10YR2/3	黒褐色土	SiL	強	弱	
SK27	1	10YR3/4	暗褐色土	SiL	強	弱	

挿図8　SK21～27


SBX06
BW07
SB05
SK 21
攪乱
SK 17
SK 19
SK 20
BW10
BV11
SK 16
SB 06
SB 04
SK 12
SK 13
SK 18
34
SK 18
SK 11
BV14
BU15
SK 10
SD 03
SK 09
SK 08
SK 14
SK 15
SB 03
BU18
BT19
SK 07
SB 07
BT29
BS28
SK 24
SK 25
SK 26
SK 27
SK 22
BT31
BS32
0
2m

挿図9　Pit図

第Ⅳ章　まとめ

今次調査は、そのほとんどが幅２ｍ程のトレンチ調査であり、遺跡の全容が解る調査とは言えなかった。しかしながら、縄文時代中期前葉から奈良時代以降にかけての遺構が確認され、長期間にわたる遺跡の存在が明らかとなった。各時代・時期について概観して、まとめとする。

１　縄文時代

今次調査で確実に縄文時代の遺構と捉えられるものは、ＳＫ13・ＳＫ22の２基の土坑のみであったが、古墳時代に比定される住居址等の遺構の多くより、該期の遺物の出土が見られた。

特に、古墳時代竪穴住居址ＳＢ06の埋土より出土した第３図１は、中期初頭と今次調査にて出土したもっとも古い土器で、関西の大歳山式に比定され、市内では上郷黒田大明神原遺跡の竪穴住居址内等にて多数出土したほか、各地に断片的資料があり、伊那谷がこの時期に関西地方とかなりの交流を持っていた事が確認される。またＳＫ22にて出土した第３図23・24は、座光寺大門原遺跡の30号住居址出土土器と類似し、中期中葉末の井戸尻式である。

本遺跡の一段高い段丘上に立地する上の坊遺跡で平成３年度に実施した調査で、前期後葉の土坑が検出されていること、また本遺跡内でも平成元年におこなった上川路公民館建設に先立つ調査で、中期中葉から後葉の遺物が多数出土していることより、この段丘面上および一段上位の段丘面上一帯に前期後葉から中期中葉の集落が広範囲に存在する可能性が高いと指摘できよう。

２　弥生時代

今次調査では調査区全域で後期前半から後半の遺物が出土したが、遺物のほとんどは、古墳時代後期に比定される遺構の埋土より出土しており、いずれも破片で該期遺構は確認されていない。

当地方の該期遺跡においては、わずかな土器片が確認されたのみであっても、溝・竪穴住居址等の遺構が存在する例が大半であり、古墳時代以降の施築等により破壊された住居址等の存在した可能性が高い。

また、本遺跡と立地条件の似た久米川を隔てた川路地区の低位段丘で確認された井戸下遺跡では、中期から後期の集落が出土しており、これら周辺の遺跡環境・地形等より鑑みても、本遺跡内に該期集落の存在する可能性は高い。

３　古墳時代

今回の調査で最も遺構・遺物が多かった時期で、５世紀後半から６世紀の集落の一端が明らかになり、該期の周辺古墳との関連が指摘される。本遺跡内にある御猿堂古墳の築造時期が、６世紀前半であり、この古墳の築造に係わった人々の集落の一画を成すと判断される。

また調査開始当初には、調査対象範囲内に新屋敷古墳の存在を示す記述が下伊那史にあり、周溝もしくは墳丘の一部が調査区内で確認される可能性があった。しかしながらそれらは確認されず、また埴輪も出土していないことより、今まで予想されていた位置よりも南側に存在した可能性が高い。

また、上段台地の上の坊遺跡では、古墳時代前期から中期の貼り石を持つ方形周溝墓が出土しており、前期より続く集落の存在も予想される。

その他、本遺跡内にある町並古墳・塚前古墳・開善寺境内古墳、また本遺跡北側に近在する塚原古墳群・金山古墳群との関係についても、今後考えていく必要がある。

4　奈良時代以降

この時期の確認された遺構は7号住居址のみであり、また遺物も須恵器の坏が一点あるだけで、多くを記述することは困難である。

既出土瓦から、7世紀末の建立とされる上川路廃寺の位置は、現開善寺の西側一帯と推定されており、今回の調査箇所とは100m程を隔てている。

今回の調査では、瓦等7世紀に属する寺院との関連を直接示す資料は出土しておらず、寺院域の外部にあたると言える。

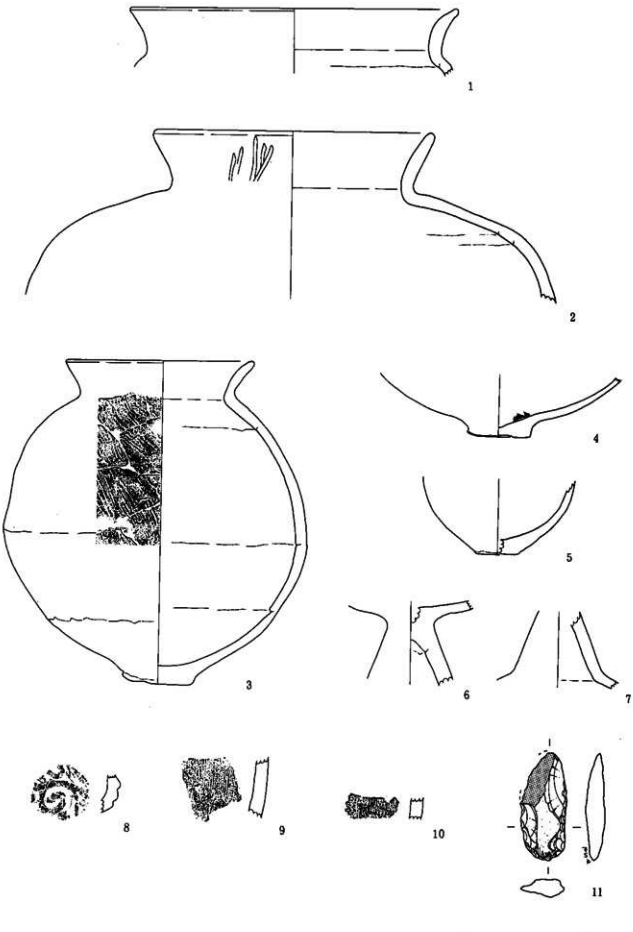
しかし、調査範囲が狭小であり、一部の確認のみに終わった古墳時代と把握した竪穴住居址の中には、当該期に含まれるものが存在する可能性もあり、寺院が存続した8世紀代の7号住居址の存在からも、今次調査範囲一帯も上川路廃寺の建立に、またその存続に深く係った集団の居住域であったことは想像に難くない。

また、昭和48年の考古資料館建設、平成元年の上川路公民館建設に先立つ発掘調査では、鎌倉時代以降の開善寺に関係する遺物が数多く確認されたが、今次調査では出土しておらず、広範囲を境内とした中世の大伽藍も、今次調査箇所の台地東端まで広がっていなかったことを明らかにし得た。

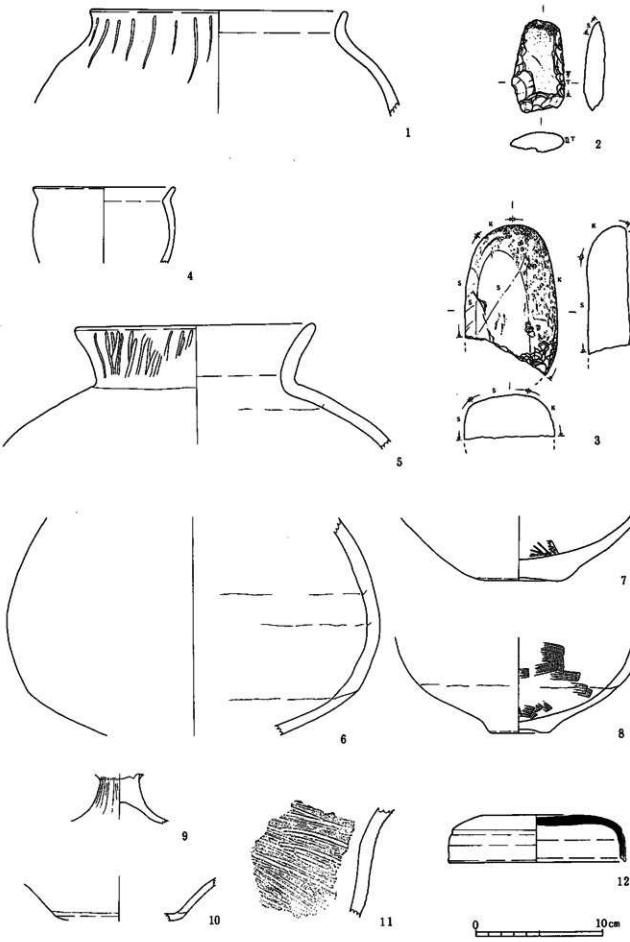
以上、概略を述べたわけであるが、本遺跡は当地域の歴史を考える上では不可欠な遺跡であるといえ、御猿堂古墳・上川路廃寺址を含めた遺跡全体の保全に、より一層努めていく必要がある。

参考文献

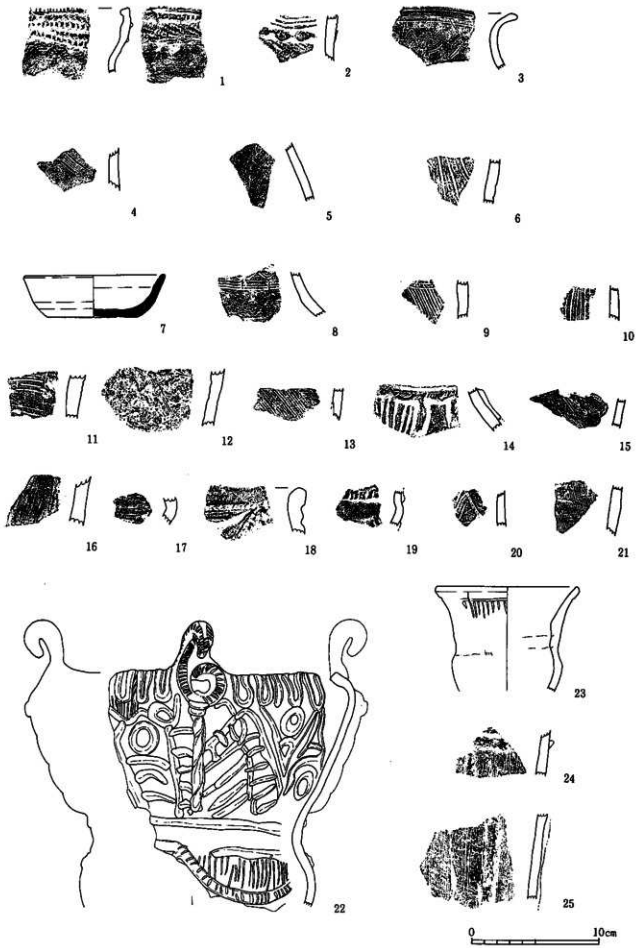
飯田市教育委員会　１９７４　『開善寺境内遺跡』
飯田市教育委員会　１９８６　『恒川遺跡群』
飯田市教育委員会　１９９１　『開善寺境内遺跡』
飯田市教育委員会　１９９７　『黒田大明神原遺跡』
飯田市教育委員会　１９９８　『飯田の遺跡』
飯田市教育委員会　１９９９　『大門原遺跡』
川路村誌編纂委員会　『川路村誌』
下伊那誌編纂會　１９５５　『下伊那史』　第二巻
下伊那誌編纂會　１９５５　『下伊那史』　第三巻
下伊那地質誌編集委員会編　１９７６　『下伊那の地質解説』
長野県史刊行会　１９８１　『長野県史　考古資料編　全一巻（一）遺跡地名表』
長野県史刊行会　１９８３　『長野県史　考古資料編　全一巻（三）主要遺跡（南信）』



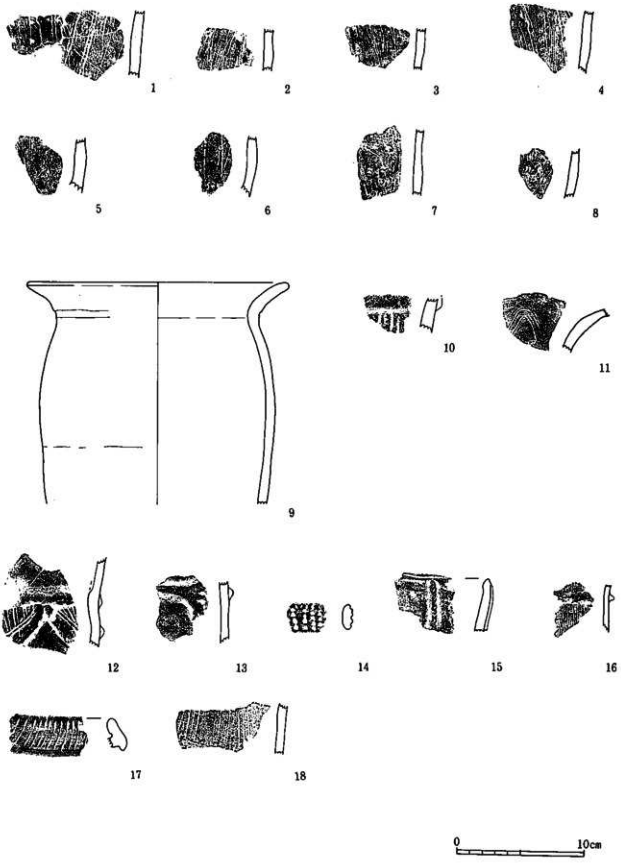
第1図　SB03（1）・SB04（2～11）



第2図　SB05（1～3）・SB06（4～12）



第3図　SB06（1～6）・SB07（7）・SD03（8～10）・SK08（11・12）
SK11（13）・SK13（14）・SK15（15）・SK16（16・17）
SK20（18～21）・SK22（22～25）



第4図　SK22（1～8）・SK24（9～11）・遺構外（12～18）

調査風景

調査風景

重機作業風景

図版2

西側調査区全景

東側調査区全景

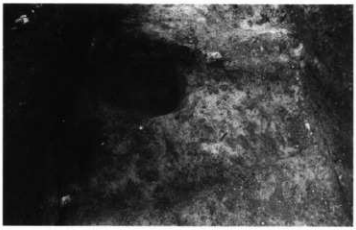
SB05

同カマド

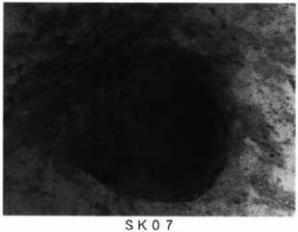
図版4

SB03

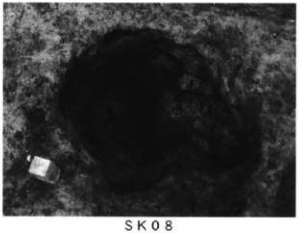
SB06



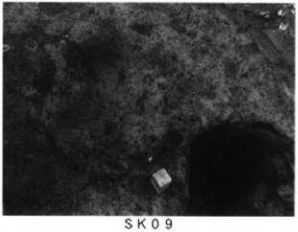
SD03



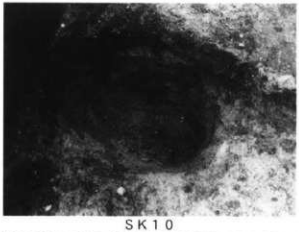
SK07



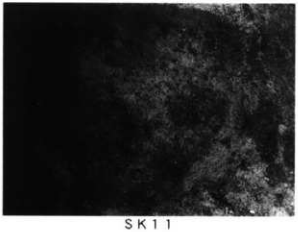
SK08



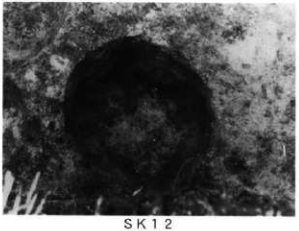
SK09



SK10

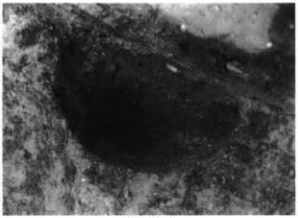


SK11

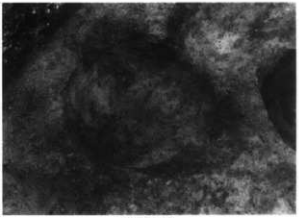


SK12

図版6

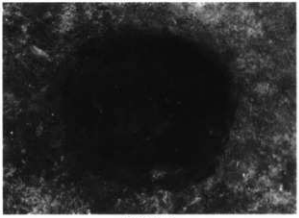


SK13

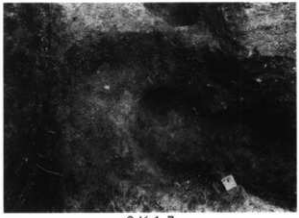


SK14

SK15

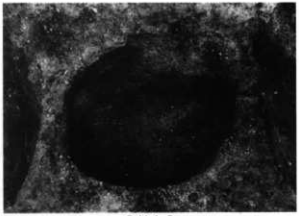


SK16

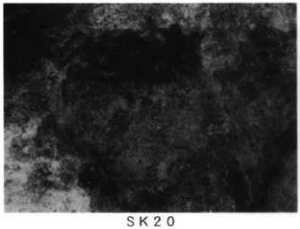


SK17

SK18



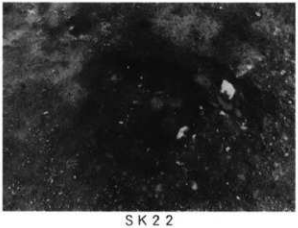
SK19



SK20

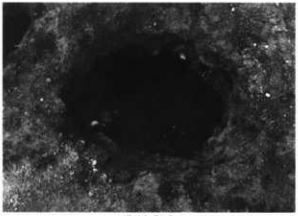
SK20

SK21

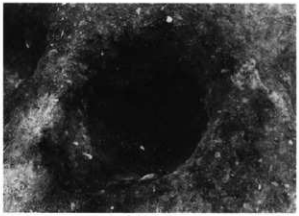


SK22

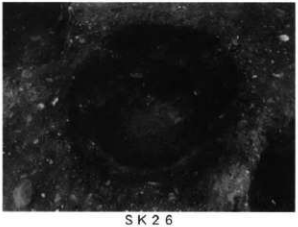
SK22断面



SK24



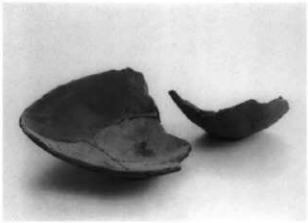
SK25

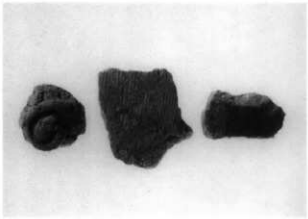


SK26

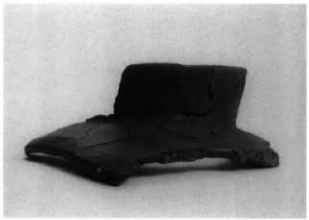
SK27

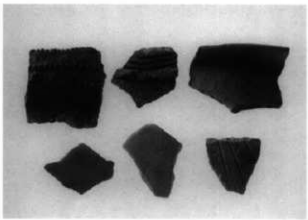
図版8

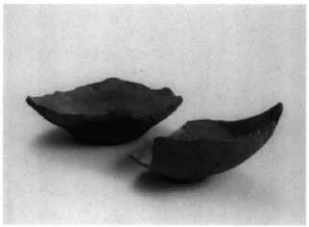




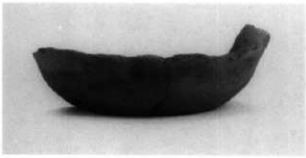
SB03、04、05



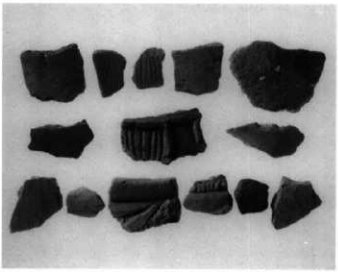




SB06



SB07

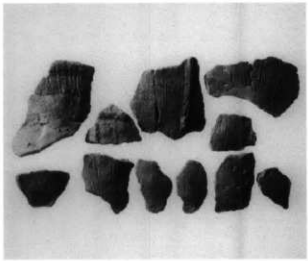


SD07
SK08～SK20

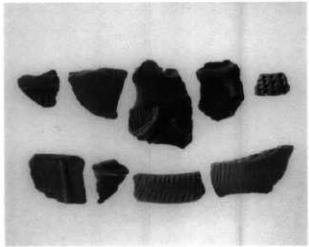
図版１０

ＳＫ０３

ＳＫ２４



ＳＫ２２



ＳＫ２４
遺構外

報告書抄録

ふりがな	かいぜんじけいだいいせき
書名	開善寺境内遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福澤好晃
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-0002　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　☎0265-53-4545
発行年月日	西暦2001年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在・地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かいぜんじけいだいいせき 開善寺境内遺跡	いいだしかみかわじ 飯田市上川路	2053	30° 27′ 27″	137° 49′ 4″	平成11年 11月4日 ～平成11年 11月3日	92㎡	市道 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
開善寺境内	集落址	縄文時代	土坑　2基	縄文時代 土器・石器	5世紀後半～6世紀の集落が出土する
		弥生時代		弥生時代 土器・石器	
		古墳時代	竪穴住居址　4軒 溝址　1条 土坑　2基	古墳時代 土師器・須恵器	
		奈良以降	竪穴住居址　1軒		
		時期不明	土坑　16基		

開善寺境内遺跡

調査報告書

2001年3月　発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地
長野県飯田市教育委員会
印　　刷　飯田共同印刷㈱